

## 会 議 録

|       |   |
|-------|---|
| 会議名   | 山形市総合教育会議   |
| 開催日時  | 令和6年2月5日（月） 10:30～12:00                                     |
| 開催場所  | 山形市役所3階 庁議室   |
| 出席者   | 佐藤孝弘市長、金沢智也教育長、<br>白鳥樹一郎教育委員、中村篤教育委員、細谷真紀子教育委員、<br>伊藤洋子教育委員 |
| （事務局） | 高橋一実教育部長、大沼裕子事務局次長、<br>細谷直樹学校教育課長、阿部宏図書館長、<br>西村尚人教育企画課長    |
| 協議事項  | 魅力ある図書館づくりを目指して   |

### 会議経過

1 開 会 （西村教育企画課長）

2 挨拶 佐藤市長・金沢教育長

3 協 議 （座長 佐藤市長）

「魅力ある図書館づくりを目指して」

パワーポイントを用い、阿部図書館長及び細谷学校教育課長より説明。

<意見交換>

【佐藤市長】

それでは、本日の協議事項についてご意見をいただきたい。

まず、私から教育とまちづくりの2つの視点で意見を述べさせていただきます。

教育的な視点から先に申し上げますと、根本的に本を読むことは人間の成長に不可欠であるということ、広く市民に共有したいと考えており、特に子ども達にはこのことを何度強調してもしすぎることはないと考えている。今の子ども達はインターネット前提で育ってきているが、やはり図書館に並んである本とインターネットの情報とでは大きな違いがあり、相対的にインターネットの情報は玉石混交であるように感じる。

メディアに関しても、紙の媒体を有するメディアと、インターネット上だけのメディアを比較すると、情報のスクリーニングにおいて大きな差があると感じる。加えて、インターネットには SNS や広告の誘導もあり、それらは AI が自動的に判断し紹介するものであるため、特定の思考や傾向を更に強化するものがほとんどである。そうすると、他の価値観が生まれにくくなるため、最終的には陰謀論のようなものを単純に信じてしまうなど、判断力の低下にも繋がり兼ねない。こうしたインターネットの特性やリスクも考慮したうえで、バランス良い情報収集のあり方を子ども達には教育していく必要があるだろう。そのようなことから、たくさん本に親しむことは人生を豊かにするうえで大変良いことであるため、学校教育や市立図書館においても、一層読書を推奨していくべきであると考えている。

次にまちづくりの視点だが、本のひろばや市立図書館中央分館のリノベーションによって、こんなにも違うものかと驚くほど、若い人達が訪れるようになった。図書館というものが、年齢や世代に関係なく、皆が集まることのできる場所であるということを改めて実感した。これはまちづくりにとって重要なことで、本のひろばのように、ちょっとしたスペースを有効活用するだけでも大きな変化が生まれるということがわかった。今後まちづくりを進めていくにあたって、創意工夫によりこうした場面を多く作っていきたい。

それでは、ぜひ委員の皆様からのご意見を賜りたい。

### 【白鳥委員】

事務局の説明を聞いて、魅力ある図書館づくりを目指して日々努力していることが良く分かった。以前にも図書館についてはこの会議で取り上げているため、その際の発言と重複するところがあるかもしれないが、5点、話をさせていただきたい。

1つ目はハード面についてである。市立図書館本館は昭和54年に建築されたものではあるが、是非これからも大事に使っていただきたい。そのうえで、将来の改築が議論される際には、「地域コミュニティづくり」や「まちづくりの基盤」、「カフェの併設」など、色々検討されることと思うが、まずは今ある資源を最大限活用していくことを考えてもらいたい。ちょうど昨日、魔女の宅急便の作者で有名な角野栄子さんの児童文学館がテレビで取り上げられていたが、館内の色やレイアウトが工夫されていて、その中で子ども達がうれしそうに本を手取る様子が映し出されていた。山形市の市立図書館も、特に児童書のコーナーなどを更に工夫し、より良いものにして欲しい。

2つ目は、公共の図書館として、市民の要望に広く応える取り組みを続けて欲しいということである。活字離れと言われて久しいが、この課題に取り組むのも市立図書館の大きな使命のひとつであろう。そのためにも、まずは市民が読みたい本のニーズを広くつかむことが重要である。それを基に、次は幅広く新刊書をそろえ、それらをホームページなどでも十分に周知していく必要があるだろう。また、地域と関わりを更に深めるため、これまで以上に「地域に関する資料の収集・活用」や充実した企画展の開催にも取り組んで欲しい。

3つ目は、司書の資格を持つ職員を増やすことに、継続して取り組んで欲しいということである。学校でも司書教諭の免許を持つ先生を増やす取り組みが行われている。「どんな本をそろえるか考える」、「子ども達に適切な本を薦める」「本を生かした教育計画を立てる」など、司書教諭は大きな役割を持ち、規模が12学級以上の学校には、司書教諭を置かなければならないと学校図書館法で定められている。市立図書館でも司書の資格を持つ職員を更に増やし、より良い図書館運営に繋げて欲しい。

4つ目は、学校との繋がりを更に密にして欲しいということである。例えば、小学校4年生で「ごんぎつね」の学習を行うが、その際には「おじいさんのランプ」や「花のき村と盗人たち」など、作家である新美南吉の関連本を学級文庫のような形で複数学級に配備し、学習期間中に子ども達がいつでも手に取ることができるようにしている。これは、市立図書館で行っている団体貸出のおかげで実現できているものである。是非、今後も学校のニーズを密に拾いながら、子ども達の学習に関係する蔵書を増やして欲しい。

5つ目は、市立図書館中央分館のリノベーションの成果が継続するよう、現在の利用者ニーズをきちんと把握したうえで、更なる取組を進めて欲しいということである。私は、霞城セントラル23階の「学習空間 mana-vi (マナビー)」の運営に関わっているが、マナビーは日中もかなりの利用者があり、放課後や休日はいつも満席である。元々七日町にあったマナビーが霞城セントラルに移ったことにより、利用者からは七日町にも同じような場所が欲しいという声が寄せられていた。そうしたことから、中央分館のリノベーションは利用者のニーズに合った良い取組であるため、今後も更に充実していくことを期待している。

#### 【中村委員】

今回の総合教育会議にあたって、自分自身「図書館」について調べてみた。

もともと「図書館」という言葉は、明治の中期に英語の「Library」から訳されたもので、地図の「図」と書籍の「書」をとって「図書」とし、その図書を保存する建物ということで作られた和製漢語であるようだ。本来、図書館の機能としては6つあり、1つ目が資料の収集、2つ目が資料の整理、3つ目が資料の保存、

4つ目が資料の提供、5つ目が集会活動・行事の実施、そして6つ目が資料や図書館利用に関する指導ということである。

近年では、様々な情報をインターネットによって手軽に入手することができる。1人1台タブレット端末を持ち、ICTを活用する時代では当然のことなのだろうが、自分の子ども達を見ていると、分厚い辞書や百科事典などで調べ物をするという姿を目にする機会は無くなったように感じる。我々が学生の頃にあった「何か調べ物をする時は図書館で」という知識の宝庫としての図書館の位置付けが、今大きく変化してきていると実感している。

このように社会が大きく変化する中であって、今説明のあった「本のひろば」や中央分館のリノベーション、DX化に向けた取組、市民ボランティアや学校図書館との連携強化といった市立図書館の事業展開は、非常に高く評価できるところである。また、本館は市内でも自然豊かな小荷駄の杜にあり、公園も隣接して大変落ち着いた環境にある。近年では、ベニちゃんバス（東くるりん）の運行により、利便性もかなり向上している。

ここで、市立図書館に望むことを4つ提言させてもらいたい。

まず1つ目だが、子どもから高齢者まで、あらゆる市民にとって、身近で利用しやすく、心地良い居場所としての図書館であって欲しいということ。

2つ目として、学校教育と連携し、子ども達の学習の基本となる読書活動を充実させていく図書館であって欲しいということ。

3つ目として、イベントや行事を更に工夫していき、市民ボランティアや地域団体、民間団体とより一層の連携を深めていく図書館であって欲しいということ。

4つ目として、これからの地域の課題やデジタル化、国際化等、社会環境の変化に対し、常に対応していく図書館であって欲しいということ。以上の4つが、これからの市立図書館に望むことである。

最後に、先日とある講演会で聞いた話をひとつ紹介したい。モノやサービスで溢れる今の世の中において、ヒットする商品は何かという話であったが、それは「自由」で「意外」で「大胆」なものであるということだった。

これまでの発想の枠を超えた事業の展開というものが、今後の市立図書館の魅力アップの鍵となるのではないだろうか。

#### 【細谷委員】

図書とは、知識を伝える本であるという意味の通り、教育的意味合いが強いものであるが、私自身、図書とは学問としての側面だけではなく、多様な出会いを創出し、人の歴史を創り出す文化的な側面も大きいのではないかと感じている。そのひとつが全国で進む地域課題解決型の図書館整備である。それをミニマムで体現したのが今回の中央分館のリノベーションだったのではないだろうか。

地域活性化志向の公共図書館については、地域における課題解決との結びつきが相乗効果を生み出し、WIN-WIN の関係性で互いに発展していくものとして、全国的に広まった大々的な複合施設としての図書館整備が成功例として多く見られるようになったが、それは、図書としての価値が守られているからこそ成り得た発展として、きちんと見えにくい図書館の基礎的支えを見る必要がある。

図書とは、どのようにして作られ、保存・分類・利用・管理され、その発展に寄与しているのか、それを市民に適切に的確に伝えるには、やはり図書に関わる人材の育成と全国的な図書館の情報ネットワーク形成に属しているかという視点が重要だと感じる。それには専門的知識をもつ司書の配置や活躍が重要である。専任職員の採用のない中で、事務職員を司書として育成することや、職員採用のひとつの視点として司書の資格を職員自身が山形市にどう活かすのか、ということを見るのも、山形市の図書文化を支える力となり得る。

山形市の文化創造都市推進条例にもある通り、文化は、人々の心に潤いや感動、安らぎを与え、豊かな感性と表現力を育み、人々が多様性を受け入れることができる心豊かな社会の形成に寄与するものである。人々の暮らしの質を高め、活力と魅力あるまちづくりを進める上で、図書館が持つその固有の意義と創造性を守り得るのは、司書の専門的知識であると考ええる。

一方で、司書の固定的に専属的な思考だけでは、新しい価値を生み出すことは多様性を欠いてしまう可能性もあるため、司書職員には先にも言った地域課題解決といった視点で市の他部署の取組を知り、それらと連携して自身の強みである図書に活かしてもらいたい。

だからこそ、図書館自体が多様なコミュニティと連携していくことが必要である。現在、図書に関わるコミュニティとの連携は図書ボランティアとの協働があげられるが、山形市には山形連携中枢都市圏としての他市町との関わりや、県立図書館、大学図書館との連携などの他、社会課題解決のために活動する様々なコミュニティが存在する。今後はこうしたコミュニティや市の他部署との連携をより充実させていくことで、図書館の活動の幅が広がり、市民も活発に参画する、より魅力的な施設になるであろうと感じる。

本のひろばでは、多様な連携として展示コーナーの工夫なども取り組まれている。本1冊にしても、本の内容だけではなく、装丁、装画、挿絵、フォント、紙素材ひとつひとつに本としての魅力があり、そこには文化が凝縮され、そのひとつひとつが人の人生を変えるほどの力を持っている。図書が持つその秘められた力や、図書だからこそ感じることができる文章表現力、多様な図書と触れることで身につく読解力、図書を通じて出会う人との交流は、子どもたちにとって大きな財産となる。

また、近年図書コンテンツがメディアとして形を変えていくことも知的財産としての情報の扱い方を学んでいく重要な学習の基盤となっていくことは間違いない。その様な時代背景の中で、市立図書館が学校図書館と連動し、メディアセンターと書籍図書との融合を担っていくことや、DXと書籍図書の融合を見据えて人材を育成し、市立図書館を運営していくプロデュース力が必要となってくると考える。

学校図書館の役割が、蔵書の課題や人材の配置といった旧来からの課題を抱える中で、市立図書館との連携は、子どもたちの学ぶ力やICT社会の中に生きる力に直接働きかける重要な役割を担ってくると感じている。このような学校との関わりは、保護者等、地域の大人たちにとっても新しい図書館としての存在意義を確立し、その先にある高齢化・子育て・地域活性・文化継承・知の集約など地域住民の課題解決の支援ができる機能を持つ複合的存在となるための、意識・検討をしなければならないという潮流を生み出すのではないかと感じる。

最初に申し上げたとおり、図書館は学びと共に、文化を創造する施設である。人づくり・まちづくりの戦略的拠点施設・自治体のレジリエンス強化としての施設になる可能性も秘めており、単純にすべてを長寿命化・リノベーションをしていくだけが完了ではない、持続的発展が可能な創造都市としての機能・役割、そして推進に大きく寄与していく施設として、未来を見据える必要があると感じる。だからこそ、今時点ではたくさんの市民との結びつきを深め、多くの人々の心、知見を育み、論議がこの図書館という場所で深まり、人づくり・まちづくりの知の殿堂として広い領域の基盤・活動資源となる、図書館の真の価値形成ができることを期待している。

### 【伊藤委員】

まず、私がどれほど本が好きであるかについて話をさせていただきたい。こちらの本「かたあしだちょうのエルフ」は、私が小学校1年生の時に、読書感想文の課題図書として学校から推薦された本である。本が好きな両親のおかげで、欲しい本をたくさん買ってもらったため、本の購入をお勧めする封筒を学校からもらう度に、いくつも「○」を付けて本を購入していた。その中でも、この本は自分にとってとても大切な本のひとつである。当然、自分の子どもにも読み聞かせたが、今では3歳の孫も、家に遊びに来る度に、色々ある本の中からこの本を選んで読んで欲しいと持ってくる。小学校1年生向けの文章で構成された本であるため、3歳だと途中で飽きてしまうだろうと思っていたのだが、しっかりと最後まで話を聞き、話が終わると「もう1回読んで」と言ってくる。決してハッピーエンドではなく、むしろ悲しい話で、一度小学校で2年生に向けこの本の読み聞かせ会をした際には、皆が大号泣するほどであった。

この本が、今も変わらず子どもの心をつかんでいるという事実、本の持つ力や心に響く力の大きさというものを感じた。

自分自身のことを振り返ると、小学校の時は図書館に通い詰めるような子で、どうしたら図書館の本を卒業するまでに全部読めるかと思い、端から順に読んでいた。お気に入りには人体図鑑と美術本だったが、そこで様々な本に出会った。思い返すと、学校の図書館にある本は、良質な本が多かったと感じる。それは、やはり司書の方がしっかりと厳選した本であったからなのであろう。

白鳥委員が話されていたごんぎつねについても思い出があり、小学校の授業で初めてごんぎつねを読んだ際、大号泣してしまい教室から保健室に運ばれてしまったエピソードがある。また、本に関する思い出は他にもあり、中学生時代にすごく落ち込んでいた時期があったのだが、その時に担任の国語教師から、加藤諦三の「生きる」という本を読んでみなさいと渡されたことがあった。結局自分好みの本ではなかったが、その本を渡してくれた先生の気持ちが伝わり、とてもうれしかったことを今でも覚えている。このように、本との出会いは大切で、これまで読んできた本によって、今の自分自身が作られていると感じている。

さて、今の子ども達は、本よりもアニメや YouTube 等を見ることが好きで、情報もインターネットから簡単に取ることができてしまっている。非常に便利ではあると思いつつも、やはり子どもの心の成長には本を読むことがとても重要だと思っている。

本の良さは、読解力、コミュニケーション力を高めるなどの効果が検証されているが、私が一番注目しているのは想像力を養ってくれるところである。世の中がどうなっていくかわからない今のような時代にこそ、想像力を養い、予測不能な出来事にぶつかったときも、豊かな想像力で多角的に分析し、工夫を凝らして未来を生き抜いていって欲しい。そのためにも、子どものうちから是非良質な本を手にとって欲しいと思っている。

私は中学生を相手に講話をする機会が多いが、その際には、思春期とは本当の自分探しの時期だから、自分の心の奥から湧き起こる感情を大事にしようという話をしている。しかしながら、実際自分の感情にピッタリとハマる言葉を見つけることはなかなか難しいものである。本をたくさん読み、似たような言葉でも微妙にニュアンスの違うような語彙をたくさん使えるようになることは、このように自己内省や人に自分の気持ちを伝える際にとっても役に立つ。私自身、カウンセリングという仕事をするうえで、やはり相手の気持ちにピッタリとハマる言葉を伝えるよう心掛けています。例えば、あなたの気持ちはこんな感じかな、ということや、私はこんなふうに受け取ったよ、というものであるが、こうした気持ちを伝える際の語彙というものは、自分が子どもの頃から大好きだった読書で培ったものが大きいと思っています。

今の図書館にはライトノベルも多く、子ども達も好んで読んでいます。もちろんそれはそれで良いことだとは思いますが、せっかくなので純文学も読もうと薦めている。やはり昔から読まれ、今も生き残っている作品は良質なものが多い。派手なアドベンチャー的要素はないが、内省力を高め、人生に深みを与えてくれるのは、やはり純文学であると感じる。私自身、その時々でマイブームになる作家は異なるのだが、梶井基次郎を読むと夢中になっていた高校時代を思い出すなど、本を読み返す度に、当時の自分がどんな気持ちでいたのかを鮮明に思い出させてくれる。多分、今の仕事を選択したことにも、夏目漱石から始まり、純文学と言われる小説を読み、色々な主人公の生き方に感銘を受けたことが大きく関わっているのだろうと感じている。そうしたことから、例えば、魅力ある図書館づくりの一環として、図書館イベントで純文学推しの少し斜めから考察するような読書会などを開催してみてもどうか。

先日、リノベーションされた中央分館で高校生に混ざり3時間ほど仕事してみたのだが、雰囲気も良く若い人達で活気があり、大成功だと感じた。そのうえで、個人的なお願いになってしまうが、私は退職したら図書館に通いたいと思っている。是非、若者に加え、高齢者にとっても図書館というものが更に居心地の良い空間になってもらえると、私自身、第二の人生をワクワクしながら楽しむことができると思っている。

### 【金沢教育長】

「魅力ある図書館づくりを目指して」ということだが、昨年度教育長に就任して以来、市議会の一般質問でも図書館に関連するものが多く、注目の高さを実感している。ちょうど先日、井上副市長からも佐賀県武雄市にある新しいスタイルの図書館について情報をもらったほか、高橋教育部長からも高知県のオーテピア高知図書館へ視察に行った際の話聞いた。それらを見聞きしていると、自分のイメージにある図書館ではなく、まちづくりの要素として、図書館が重要な役割を担っており、多様性が求められる時代へと変化してきていることに気づかされた。

先程事務局から説明のあったとおり、山形市の市立図書館では、昨年3月に「本のひろば」を開設し、昨年9月にはリノベーションした中央分館がオープンとなった。これは「市民の来館を待つ施設」から「市民が自然と足を運ぶ施設」へと転換していくことを意図した取組であり、大きなお金をかけずとも、市民目線で知恵と心を練り込み工夫した、大変意義のある取組だと感じている。これら取組により、実際に若い世代を中心に利用者が増加しているほか、まちの賑わい創出にも貢献するなど、一定の成果に繋がっていることを実感している。



そうした取組を踏まえながら、これからの図書館への期待や願いということで、3点話をさせていただきたい。

まず1つ目は、山形市教育振興基本計画における図書館の役割についてである。基本計画の施策の方向性に「生涯学習の推進」というものがある。そこでは、市民一人一人が学びを通して生き生きと自己実現を図ると共に、学習成果を社会の中で適切に生かすことのできる「生涯学習社会」の形成、ということを目指している。「市民一人一人の学び」ということをイメージした時に、間違いなく読書活動はそのひとつであると感じる。「読書の効果」を調べてみたところ、「想像力の醸成」、「教養や知識を高める」、「話題が豊富になり会話力が高まる」など、我々の生活をより豊かにしてくれるものばかりであった。生涯に渡り心の潤いと活力を求めていくためには学びが重要であり、それを側面から支える大切な役割として、図書館の存在があるのだろうと感じている。

2つ目に、読書活動を更に広げていくためにはどうすれば良いのかについて考えたことを述べたい。現代社会は、自分の幼少時代と比べはるかに便利になっているが、生活自体は常に時間に追われている。昼食を取るにもファストフード店で簡単に済ませる人が多く、こういう時代だからこそ、本へのアクセスはできるだけスムーズにしてあげることが重要だと感じる。忙しいとは言いながらも、基本的に人間は知的探求心が高い生き物である。だからこそ簡単に本を手にとることができ、更には手続き無しで借りられる「本のひろば」のような仕組みや、DX化によりインターネット予約等のサービスを更に充実させていく取組は、本にアクセスする時間が短縮され、結果的に本に親しむ人が増えることに繋がるのではないかと考えている。

最後の3つ目は伊藤委員と重なるところもあるが、私も活字をしっかりと噛んで味わうことが、豊かな心の醸成に繋がっていくものであると考えている。今の時代はデジタルが身の回りに溢れていて、じっくりと物事を考えるというよりも、機械的に反応してしまっているような場面が増えてきていると感じる。実際、今の若者は1日に何時間も、多い人だと十何時間もスマホの画面を見つめているそうだが、実際に画面に映る文字を読んでいるのか、ただ単に反応しているだけなのか、正直わからない。「楽しい」、「悲しい」、「苦しい」というような言葉の意味を、単体ではなく文脈を通して理解し、感じるということが、豊かな心を育むためには大事なことであろう。そうした機会を提供する場としても、学校の図書館であったり、市立図書館であったりという場所は、重要であると考えている。豊かな心を持つ市民が一人でも多く増え、更に住みやすいまちとなるよう、図書館もその魅力を一層高める努力を続けながら、長く市民に愛され、大切にされる図書館となることを期待したい。

**【佐藤市長】**

ほかに意見等はないか。

**【白鳥委員】**

電子図書館の話題が出ていたが、電子図書は1冊の値段が高いと聞く。そうした意味でも、広域で取り組んでいくことは意味のあることだと思うので、是非実現して欲しい。もし電子図書としてカラー写真が載っている図鑑などがあれば、子ども達は自分のタブレットで電子図書を活用することができ、ますます可能性が広がるだろう。

他にも、各学校には司書教諭とは別に図書整理員がいるが、彼らへの研修は年に1回、市立図書館で実施しているのが唯一である。子ども達と接する機会の多い図書整理員には、こうした研修が重要であるため、ニーズを把握すると共に、更に充実させて欲しい。

**【佐藤市長】**

今日は皆さんから本に対する思いも含め、貴重な意見をたくさんいただいた。本日頂戴したご指摘も踏まえ、一層取組を進めていきたい。

**4 その他** (西村教育企画課長)

来年度の総合教育会議については、今年度同様、年2回の開催を考えている。具体的な内容については、改めて協議し、決定していきたい。

**5 閉会** (西村教育企画課長)